

# 柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話:070-1503-6401/044-988-0004

http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo

第141号

多摩丘陵に残る  
義経の面影 - 11

## 寿福寺に残る鐙と大般若経 (その1)

麻生歴史観光ガイドの会名誉会長 松本良樹

鎌倉五山の第一位 建長寺の末寺で臨済宗のお寺 寿福寺が多摩区の菅仙石にあります。創建年代は不詳ながら、かつては天台宗の寺院であったと言います。鎌倉建長寺の第84世大安法慶禅師が永徳年間(1381~84)に中興し、天台宗から臨済宗寺院へと改宗しました。義経の時代はまだ改宗前で、天台宗のお寺でした。この寺には義経たちは何度も宿泊していたと伝わっています。

文治年間(1185~89)頼朝と仲が悪くなり、奥州藤原秀衡のところまで逃げる際、この寿福寺に隠れ住み『大般若経』を写したという伝承があります。この所を『江戸名所図会』には、次のように書かれています。

『大般若経 600巻、そのうち義経と弁慶が筆跡なりと称するもの4巻ありて、その名を注せり。相伝う、文治年間義経弁慶しばらくこの地に憩ひ、曾祖の例跡を追ひ、当時観音の曾前に恢復の応験を祈り、特に大会堂に入りて文治年間経巻の闕けたるを繕写す』

この地に残る伝承では頼朝と仲違をし、奥州まで逃げる時この寺に隠れ住み史話を残したとされていますが、腰越状まで書き送った義経に会おうともせず、鎌倉に入ることも許されず都まで帰って来ます。しかしその後 暗殺団の土佐坊昌俊等 60余騎が京の義経邸を襲ったが(堀川夜討)、自ら門戸を打って出て応戦する義経に叔父の源行家も加わり、合戦は襲撃側の敗北に終わります。

義経は捕えた昌俊からこの襲撃が頼朝の命であることを聞き出すと、後白河法皇に奏上して頼朝追討の院宣を得ます。そして大物浦(尼崎)から西国九州の緒方氏を頼り 300騎を率いて退きますが途中暴風のために難破し、主従散り散りとなって摂津に押し戻され九州落ちは不可能となりました。

更にその後 今度は法皇が頼朝に対し義経追討の院宣を出したことから一層窮地に陥ることになり、吉野山をさ迷うことになるのです。義経には頼朝追討の院宣を、頼朝には義経追討の院宣を出す、後白河法皇の変わり身の早さに頼朝は、『後白河の大天狗』と評したといわれています。

この後 義経は2年弱さ迷い続けるのですが、奥州に流れ着く途中寿福寺に隠れ住んで史話を残したとされています。義経を亡き者にしようと思っている頼朝の近くを、わざわざ通って奥州まで逃げ延びたのでしょうか? やはり北国街道を通り、富樫と安宅関で会い弁慶の白紙勸進帳を読んで通過したのが史実に近いと思うのですが、皆さんはどう思われますか?

大般若経の書写以外にも、寿福寺には義経と弁慶の『鐙(アミ)』二具と『袈裟』も残されています。本堂裏の五財弁尊天池の近くには『弁慶の隠れ穴』、仙石の入り口には『弁慶渡らずの橋』という土橋もあり、弁慶が土橋を一またぎに渡ったと伝えられています。その近くには『弁慶の足跡石』もあります。私は見たことはありませんが、義経の鐙は木製で源氏の若武者が使う品の良い物だそうです。

弁慶の物は鉄で出来ており義経の物の2倍の大きさだそうです。この鐙は渡河の時に使用するものと伝わっています。

また寿福寺から下に降りたところに五反田川にかかる橋がありますが、この橋の名付け親が義経とか、『指月橋』といわれています。頼朝に追われる身となった義経一行は、平泉に逃げる途中、一夜の宿を寿福寺に求めてこの橋まで来ました。昭和9年ごろは直径10cm位の松の丸太が敷き詰められていました。このまま馬に乗って渡ったのでは馬の脚がはまって骨折してしまうため、馬から降りて点検する事にしました。ふと夜空を見上げると満月がこうこうと輝いていました。その満月を指さして『今宵もよい月じゃのうー』と言ったかどうか定かではありませんが、指月橋の指月とは正にそれなのです。(続)



寿福寺本堂

鶴見川流域の中世  
その1

中世人の生活の舞台としての鶴見川 (1)

中西望介(戦国史研究会会員・都筑橋樹研究会会員)

はじめに

鶴見川は町田市上小山田町田中谷戸を水源として横浜市鶴見区末広町で東京湾に注ぐ、全長42.5Kmの1級河川である。4つの大きな支流の恩田川は町田市七国山、早淵川は横浜市青葉区美しが丘西早淵川公園北、鳥山川は横浜市神奈川区羽沢町、矢上川は川崎市宮前区菅生緑地をそれぞれ水源としている。いずれの水源也多摩丘陵や上末吉台地の谷戸(やと)と呼ばれる小さな谷の湧水に発している。

鶴見川の流域は東京都町田市、稲城市、神奈川県横浜市、川崎市に広がり、昔の行政区分にしたがえば武蔵国都筑郡、橋樹郡、多摩郡の一部に当たっている。ここでは、主に都筑郡と橋樹郡を扱い必要に応じてその他の地域の歴史にも触れることにする。

流域の原風景

流域の大分は開発によって市街地化されているが、自然の地形が残る小野路川源流域では丘陵に登って見晴らすと、木々の緑に覆われた丘陵と谷が幾重にも続き、谷(やと)には水田が開かれ丘陵と谷戸の間にある斜面には農家と畠が点在する景色を見る事ができる。おそらく、こうした景観がこの流域の原風景であろう。中世の段階では丘陵に点在する谷戸田は自然の湧き水に恵まれて収穫が安定していたと言われている。これに比べ鶴見川・多摩川の沖積低地では蛇行や乱流によって形成した自然堤防上の微高地に集落が点在して、水田と未耕作地や湿地が入り組んだ景観であろう。沖積低地が一円水田化するのには江戸幕府による二ヶ領用水等の開削を待たなければならない。

小支流は中世人の生活の舞台

鶴見川と恩田川をはじめとする4つの大きな支流は樹木が枝を広げたようにひろがり、そこに合流する多くの小支流が多摩丘陵と上末吉台地に発達し谷を作り複雑な地形を形成している(図1参照)。その小支流(谷戸)の一つ一つが鶴見川流域の中世人の生活の舞台であった。その痕跡を確かめる手立ては文献史料、伝承、考古学的な発掘調査、板碑や石塔類、寺院や神社、中世城郭跡や経塚、地名(小字名)などである。ここで小支流(谷戸)における中世人の生活の跡をいくつか紹介しておこう。(続く)

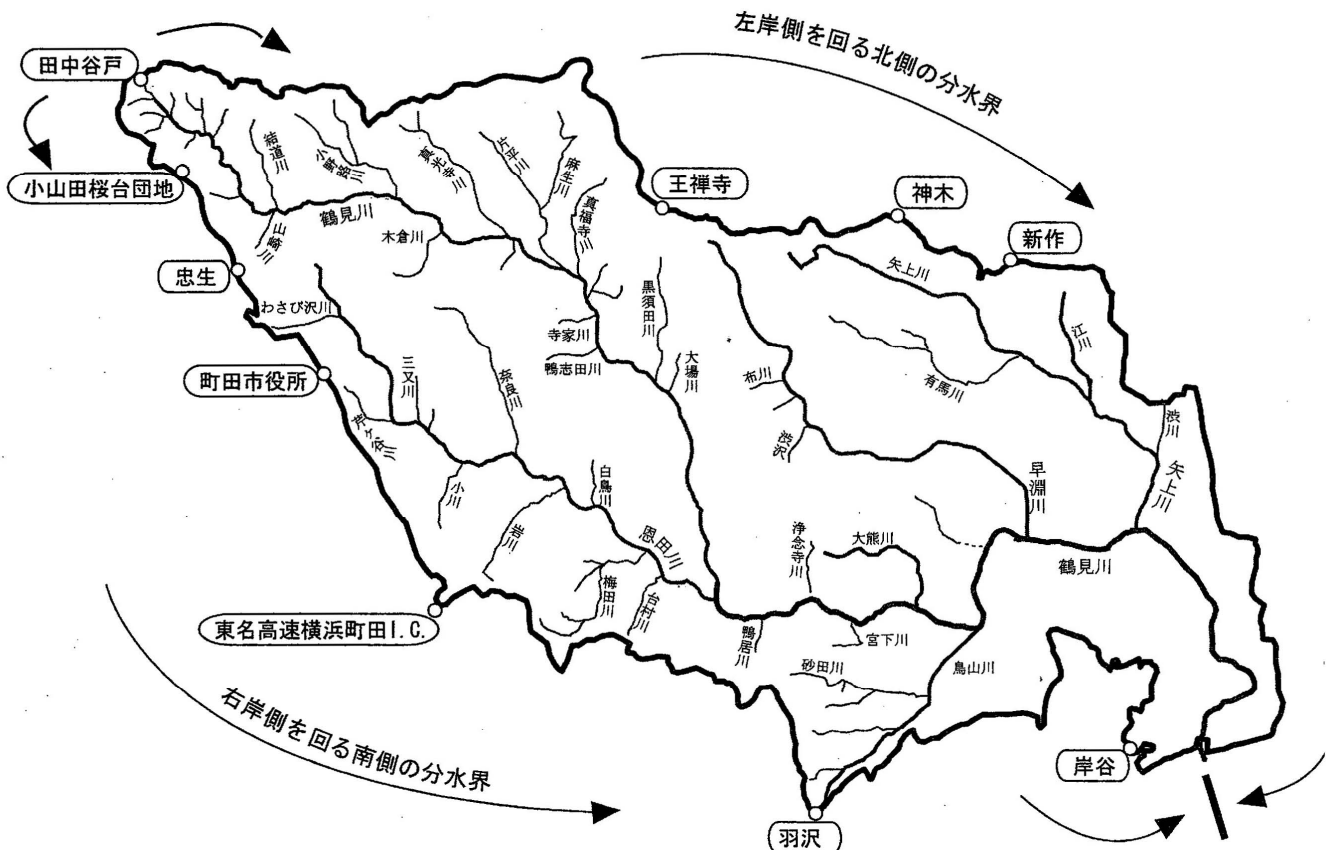


図1 鶴見川の水系・分水界図

『鶴見川流域誌／流域編』 鶴見川流域誌編集委員会 2003年より転載

シリーズ  
教育の歩み 第2部

## 学級の誕生(11)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

## ◆私設学校◆

しかし、19世紀も半ばともなれば、下層の労働者階級の間にも、読み書き計算能力の修得という、教育需要が強まってきていました。それは全ての下層労働者にまで行き渡ってはいなかったのですが、貧民の多くが、彼らなりに子女の教育に関心を持つようになってきたのです。彼らは公費補助を受ける学校に、子女を通わせることは出来なかったのですが、自分たちの仲間内に私設の学校が誕生することを歓迎し、そうした学校へ子どもたちを通わせたのです。

それは、システム化された学校でも、計画に沿って動く学校でもなく、低廉な極めて安い授業料のみで成り立つ、教科書もきちんとした教室も持たない学校でした。まさに小規模な労働者のための学校だったのです。こうした私設学校も、地域の要望を担って、数多くの識字労働者を産み出したのです。公的補助を受ける学校と違って、こうした私設学校は、お上から与えられたものではないだけに、地域の労働者たちの強い支持を受けていました。当然、当局はこうした私設学校を忌み嫌い、眼の敵にしていました。そのため1870年に始まる義務教育の成立時に、当局から邪魔者扱いされ、不当に軽んじられ、教育史の面では、何の貢献もなかったかのように扱われたのです。しかし、私設学校は、スラム街の労働者たちにとって、欠かすことのできない存在でした。彼らの子女の教育機関として、底辺の労働者子女の識字率の向上に大きな役割を果たしたのです。

ところで私設学校は、私たちが日常的にイメージする学校とは、異質な学校でした。そこには教室らしきものはなく、整然と並んだ机もなく、同年齢の子どもたちが一堂に会することもなく、しっかりしたカリキュラムに沿って、時間割通りに授業が進むこともなかったのです。それは次のような学校でした。生徒・親・教師が皆、労働者階級に属しており、外部からの財政支援はゼロ。授業料は1週間3ペンス程度と非常に安く、授業は受ける側の要望に基づいて行われ、教師は正式の指導者としての訓練など受けたことのない女性教師が殆どでした。また性別、年齢別、能力別の区分などなく、授業は教師の自宅で行われることが多く、受講生は、10人から30人程度でした。

私設学校の教師は、地元でよく知られた人物で、生徒の親たちとは友人であり、子どもたちにも良く知られた人でした。それゆえ、公的な学校の先生とは違い、子どもたちにとっても親しみやすく、近づきやすい人物でした。当然私設学校の先生たちは、誰も公的な教員資格など持たず、仕事を始める動機も様々でしたが、寡婦が生計を維持するために始めるケースが目立っていました。それ故、教師としての力量も様々でした。それでも需給関係は成り立っていたのですから、力量に問題があったり、子どもたちに好かれず、親たちからも支持されない教師は、確実に淘汰されました。実際に、「あの先生は教え方が上手だ」とか、「あの先生は、子どもたちを乗せるのがうまい」といった、近隣での評判が、教師を続ける上で、大切でした。

こうした私設学校に、底辺の労働者たちはわが子を通わせました。週3ペンスの授業料は、極貧の人々には重い負担でした。当時の最下層の労働者の週給は、およそ5シリング(当時の1シリングは12ペンスなので、5シリングは60ペンス)程度でしたから、子どもを1人通学させると、収入の5%を教育費に割くことになります。それでも教科書等の負担がないこと、必要最小限の教育だけを受け、労働者にとって不必要なことは学ぶ必要がないため、通学期間が短くて済むなど、負担を抑える工夫もあったのです。

授業料の点で、底辺の労働者たちは、とても子供たちを公的補助のある学校に通わせることは出来なかったのですが、彼らが、「内外学校協会系」の学校や「国民協会系」の学校を嫌った理由はほかにもありました。それは、こうした公的補助を受ける学校が、教師の権威に生徒たちを盲目的に従わせ、学校が一方向的に定めた規律を守ることを強制し、本人たちが必要としない学習をも強制的に学ばせることにありました。それは、彼らの生活のルールと相いれないものでした。労働の世界における相互助け合いの精神、人と人との結びつきを重視し、半ば身内である近隣者を教師とし、生活のリズムに沿って柔軟に動く私設学校と、地域社会を超え、機械的リズムで動く組織化された学校には、天と地ほどの開きがあったのです。



おばさん学校と蔑視された私設学校の一つ。半地下室の住まいが教場を兼ねたので、部屋には洗濯物もかけられているが、誰も気にしない

(続く)

## 柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

**2月** 1・15・22・29日(毎土曜日)

**3月** 8・15・22・29日(毎日曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (2月8日は休館です)

第84回  
カルチャーセミナー

### 秩父流平氏 畠山重忠と稲毛重成 ～その鉄並びに杉山神社とのかかわりを追う～

東国の鍛冶棟梁と言われる秩父氏の嫡流 畠山重忠と彼の従兄弟 稲毛重成。この二人の鉄とのかかわりを確認し、さらに杉山神社との接点を探ります。

杉山神社の分布範囲は、秩父流平氏の勢力分布と驚くほど重なっており、杉山神社解明の新たな糸口からのアプローチです。

日時 : 3月29日(日) 13時30分～15時30分

講師 : 岡田誠治氏 (麻生歴史の会副委員長)

会場 : 柿生郷土史料館特別展示室

柿生郷土史料館友の会  
第12回史跡見学バスの旅

### 横浜・横須賀めぐり ～三溪園と軍港巡りそして戦艦「三笠」～

日 時 : 2020年4月14日(火)

主な見学先 : 三溪園 東京湾を望む横浜の東南部本牧に広がる広大な庭園  
横須賀軍港巡り 約45分間のクルーズ  
戦艦「三笠」 日露戦争の旗艦

(当日寄港している自衛艦があれば、その特別見学に切り替え)

募集人員 : 先着45名

集 合 : 午前7時45分 新百合丘駅北口(21ビル前の歩道)

解 散 : 午後6時頃(新百合丘駅北口→柿生駅付近)

費 用 : 8,500円程度(昼食付)

申し込み : 往復はがきに必要事項を記入の上、柿生郷土史料館まで

必要事項 : 参加者全員の郵便番号、住所、氏名、年齢、連絡先電話番号

送付先 : 215-0021 川崎市麻生区上麻生6-40-1 柿生中学校内 柿生郷土史料館  
(お近くの史料館支援委員にお渡しいただいても結構です)

申込締切 : 3月15日(日)

問合せ先 : 小林基男 080-5513-5154 または 044-989-0622

またはメール zabi@za.wakwak.com

第18回 特別企画展

### 続 戦中・戦後の教科書展

柿生中学校の創立70周年記念事業に、協賛する形で開催した、戦中・戦後の教科書展は、幸い好評のうちに終了となりましたが、皆さまから、再度実施してほしいとの声もあり、2017年10月以降に、新たに見つかった戦前・戦中の教科書も相当数に上ることから、新発見の教科書も加えた形で、ここに改めて、「続 戦中・戦後の教科書展」として、再度教科書の特別展を開くこととしました。現在の教科書との違いを、しっかりご覧ください。

期間 4月4日(土) ～ 8月29日(土)

会場 柿生郷土史料館特別展示室